YNU 横浜国立大学 YOKOHAMA National University

YNU PRESS

YNU TIMES

vol. 10

2026

YOKOHAMA NATIONAL UNIVERSITY

Take Free

YOKOKOKU KOKUKOKU

横国刻々

知をひらく。まちをひらく。

課題解決のための
地域と大学の新たな関係を特集

CONTENTS

特集

02-11
知をひらく。まちをひらく。

04-05
01 羽沢横浜国大駅周辺Core
YNU BASE HAZAWAで共に考える、
地域の農業や防災
まちガク！・まちラボ！

福祉のまちを地域住民と考える
常盤台まちづくり応援団

06-07
02 横浜都心Core
地域の文化的潜在力の向上を目指して
神奈川県立歴史博物館との博学連携

関内を舞台に考える社会実装プロジェクト
アーバニストスクールプログラム

08-09
03 新湘南Core
歳をとっても健やかに歩き、
快活に働くことができるように
てくてくてっくワークショップ

医療現場との人材交流と
課題解決の連携を考える
オモロイ病院プロジェクト

10-11
04 県西Core
真鶴の海の魅力を知り、その環境保全を考察
海まちラボ「海トーク」

過ごしやすい空間を考える
キャンパスの魅力を耕すプロジェクト

12
YNU NEWS Vol.10

13-19
YNU PEOPLE

14 **データサイエンスで社会課題に挑む。研究と実社会の架け橋となって、新しい価値を生み出す。**
本橋 永至（国際社会科学研究院 教授）

16 **「言えない空気」を壊すために、学生が挑んだ生理の企画展**
井上 歩美（教育学部 学校教員養成課程 特別支援教育専門領域 3年）
頭島 壮汰（教育学部 学校教員養成課程 教育学専門領域 3年）

18 **「スーパークリエータ」認定は通過点。社会の課題解決に貢献し続ける研究者でありたい。**
九鬼 琉（環境情報学府 情報環境専攻 情報学プログラム 修士課程1年）

20-21
横浜国大の名物授業！

技術経営論
真鍋誠司（経営学部／国際社会科学研究院／総合学術高等研究院 教授）

建築史実習
守田正志（都市科学部／都市イノベーション研究院 准教授）

Tennis: Beginning
相羽枝莉子（教育学部／教育学研究科 助教）

22-24
横国生のオン&オフ事情

22 CASE_01
気象学と猫サークルに夢中！ 都市科学部　鈴木海聖さん

23 CASE_02
日本の文化と社会を学ぶ！ 都市科学部　カンメイボンさん

24 CASE_03
ロボット製作と登山に没頭。 理工学部　後藤 開さん

横浜国立大学の地域連携プラットフォーム「Y-Plat & NCC」は、
教員・学生・行政・企業・市民らが手を取り、
まちごとの課題を共に見つけ、解く場をつくるムーブメントです。
日常の一歩一歩を共に観察し、誰かのための花や歩道の安心を育む——
そんな細やかな関わりこそ、未来の地域共創の原風景といえるでしょう。
学びのキャンパスは教室だけではなく、
駅前や商店街、森、公園、地域の営みのすぐそばに広がっています。
横浜国立大学は今、学生や地域の人々と共に、
まちの声を拾い、未来の暮らし方を紡ごうとしています。
理論と実践、学びと暮らしを溶け合わせながら、
大学が「知の場」として地域社会にひらかれる姿が、ここにはあります。

広報委員会　委員長（理事・副学長）
泉 真由子

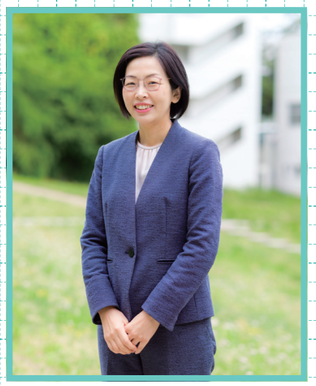
知を ひらく。
まちを ひらく。

横浜国立大学は地域社会と連携しながら教育・研究を行ってきました。今後もこの活動を発展させ、社会・地域課題の解決にさらに貢献することを目指しています。横浜、神奈川地域をフィールドとして、各課題に対して適切なチームを形成し、教育・研究・実践活動を通して、その成果を還元していきます。

地域と共に描く未来

本学では、地域と連携・協働する実践型の研究・教育活動の推進とその成果を発信する仕組みとして、2017年に「ネクスト・アーバン・ラボ（NUL；Next Urban Lab）」を発足させました。NULには毎年、専門の異なる教員や学外関係者で構成されたユニットが登録され、特定地域を対象にさまざまな研究・教育活動が進められています。ユニットごとに対象地区や対象地域の課題解決に貢献してきましたが、各ユニットが異なる方向を向いて活動をしているため、ひとつの地域を大きく変える原動力にはなりにくい側面がありました。少子高齢化、気候変動、激甚災害……、多くの課題を抱える現代社会においては、集団で同じ方向に向かって行動し、地域全体を良くしようとする仕組みも必要です。そうした背景のもと2022年からスタートしたのが「ネクストコラボレーション拠点（NCC；Next Collaboration Core）」です。4つのNCC（羽沢横浜国大駅周辺、横浜都心、新湘南、県西）において、Y-Plat（本学と一緒に社会・地域の課題を発掘・解決するプラットフォーム）から抽出されたさまざまな課題に対し、各拠点に集う教員や学生、地域の人々や自治体、企業など複数のプレイヤーが協力して解決に取り組んでいます。学生にとって、学びの場はキャンパス内だけではありません。教員にとっても同じことが言えます。実際にある街や地域の中で、社会の変化を肌で感じながら考え行動する。それこそが、本学がめざす「実践知」にほかなりません。

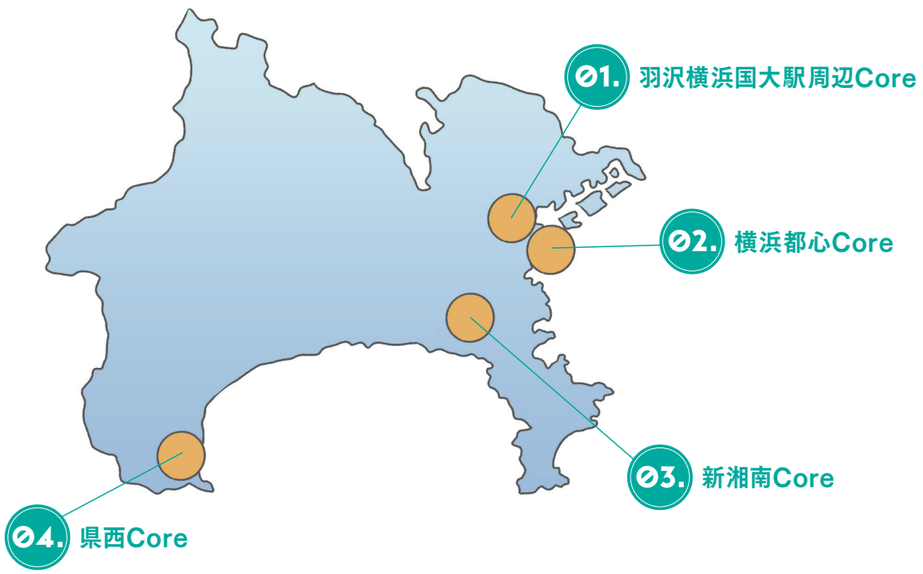
どの拠点も、専門を問わず多様な分野の学生や教員が協働し、地域とともに学び、思考と試行を重ねながら未来を描いています。そこでは専門知識のみならず、人と人をつなぎ、まちの新しい価値を共に創り出す力が磨かれます。地域をフィールドにした探求の礎は、「社会をより良くしたい」という志です。本学のNCCは、誰もが幸福を実感できるような持続可能な社会の実現を目指し、学内外の枠を超え未来志向の人材を輩出し続けていきます。



田中稲子
TANAKA Ineko
副学長（地域担当）

4つのNCC拠点

各拠点では、教員や学生、地域の人々や自治体、企業など複数のプレイヤーが集い、地域の課題解決に取り組んでいます。



01. 羽沢横浜国大駅周辺Core

羽沢横浜国大駅前のサテライト施設「YNU BASE HAZAWA」。
ここは地域の課題を近隣住民と学生が共有し、解決に向けてともに活動する新拠点です。
本学周辺地域および相鉄沿線地域で行われてきた研究・教育プロジェクトを、
2024年より継続・発展させてきた場でもあります。

YNU BASE HAZAWAで共に考える、地域の農業や防災
まちガク！・まちラボ！

地域連携推進機構
今福 嶺 地域連携コーディネーター
IMAFUKU Lei

イベントを通して模索する新たなアプローチ

「まちガク！・まちラボ！」は、YNU BASE HAZAWAを会場に2025年7月から継続してきたイベントシリーズです。なかでもトークイベントである『農を通じたまちづくり』は、広大な農地を持つ羽沢地域と、農業による地域活性化を理念とする本学の実習課題「アグリッジプロジェクト」とのコラボレーションによるもの。農家のみなさんや野菜ソムリエをお招きして、羽沢における農業の魅力や課題についての議論を展開しました。イベントの最後には羽沢で作られた野菜を使った料理を提供し、地域の農業を身近に感じていただきました。

一方で、大学生にできる防災・減災活動を実践している「BOSAIラボ」が開催したのは『防災実践ワークショップ』。地域の方々が学生とともに楽しく防災について学べる体験型のイベントです。クイズに挑戦しながら防災の知識を身につける「災害コーナー」や、防災グッズを作って備えの大切さを学ぶ「防災コーナー」があり、災害時に役立つ知識や技術への理解を深められます。ここでは小・中学生のお子さま連れのご家族が楽しそうに過ごす姿が見られました。

「まちガク！・まちラボ！」は、ともすれば閉鎖的になりがちな学内の知を開放し、地域の課題解決の新たなアプローチを模索する試みです。学生にとっては地域の生の声を聴く貴重な場であり、地域のみなさんにとっては大学の研究に基づいた一味違う知識や体験を得られる場となります。イベントの開催を通じて、YNU BASE HAZAWA自体の認知度の向上やさらなる活用を進めながら、地域に開かれた拠点として大学と地域の双方にメリットのある関係性を構築していきたいと考えています。

工藤 優太
KUDO Yuta
都市科学部
環境リスク共生学科
3年

農業の問題を考える仲間を増やしたい

幼少期から農業に強い興味があったことから「アグリッジプロジェクト」に関わり、その延長で「まちガク！・まちラボ！」にも参加しました。『農を通じたまちづくり』では、司会者がテーマを一度投げかけると、農家さんたちと学生・参加者の間で何ターンも会話のラリーが続いたことが印象的でした。専門知識に触れ、農や食への興味が改めて刺激されたひとときです。ふたつの活動を通じて、農業の持つ可能性を改めて認識するとともに、農業はとても身近な存在であり、誰に対しても関わるきっかけは開かれていると実感しました。今後も地域に出て活動し、農業に関わる人を育てたいし、これまで無縁だった人たちも巻き込んでいきたいです。その結果、農業を良くしたいと思う仲間が増え、地域の農業が抱える大きな問題を解決していければと思っています。

福祉のまちを地域住民と考える
常盤台まちづくり応援団

都市イノベーション研究院
藤岡 泰寛 教授
FUJIOKA Yasuhiro

住民の自治力を喚起し、安心して住み続けられるまちづくりを

2009年に本学の西門前に建設された「横浜市常盤台地域ケアプラザ・コミュニティハウス」の建築と運営企画のために、建築計画研究室（大原一興教授・当時）が立ち上げたのが「常盤台まちづくり応援団」です。ここでは地域住民からの呼びかけに応え、まちづくりワークショップをこれまで69回企画・実施しています。常盤台地域と本学の連携は、「羽沢横浜国大駅」の開業に伴い策定された横浜市初の住民提案型バリアフリー基本構想にもつながりました。策定過程では羽沢地域も連携。区をまたいだ地域のつながりも生まれています。今後は、2025年3月に横浜市が認定したまちづくりプランの実現を目標に掲げています。これは、神奈川区と保土ケ谷区、両区にまたがる地域まちづくりの取り組みです。

「ときわ学びフェス」「はざわ学びフェス」は、先生役となる地域住民が、おのおのの特技を活かして多世代がふらっと寄れる居場所を作ることを目的としたイベントで、去年のあそびフェスに続いて実施されたものです。まちの人が先生役となり、料理講座や松ぼっくりアート講座、お米と日本酒講座などに加え、公園での昔あそび講座や、地域に設置されている標識（道案内や地域の魅力案内板）を巡る「まちあるき講座」などが開催されました。羽沢・常盤台地域は、道が狭く坂の多い高台住宅地なため、地域の交流は薄れがちですが、住民自らがまちに関心を持つことで、地域への誇りや愛着が育まれ、多世代の支え合いが生まれます。結果、安心して住み続けられるまちづくりにつながります。常盤台まちづくり応援団は、住民自らが考え、実行するための意見交換の場です。引き続き地域特有の限定情報の資料作成や、データベース化を進め、まちづくり研究センターとして地域住民をサポートしていきたいと考えています。

松木 景虎
MATSUKI Kagetora
都市イノベーション学府
建築都市文化専攻
修士1年

地域の声を聞き、まちの魅力を高めたい

「ときわ・はざわ学びフェス」で、地域に新しく設置された標識を活用し、坂や道の名前の由来、地域の歴史を歩きながら紹介する「まち歩き講座」の企画・運営に携わりました。企画段階では、自治会長さんたちと何度も打ち合わせを重ね、内容を練ったことが印象に残っています。世代や立場が違うせいか視点が異なり、なかなか意見がまとまらなかったのですが、関係者全員で現地を歩くことで「未来にどんなまちを残したいか」の共通イメージを描くことができました。イベント当日は、子どもからご年配の方まで幅広い年代の方々にご参加いただいたのですが、「普段通る道にこんな歴史があるなんて」「地域に愛着を持てた」といった声が届き、地域資源を再認識できた次第です。今後も地域の声をすくい上げながら、暮らしの価値を高める居場所づくりに携わりたいと思っています。

02.

横浜都心core

日本の近代化の中心地であり、歴史的・文化的資産を豊富に抱える横浜臨海部。
横浜都心 Core では、このエリアならではの魅力を
都市再興の観点から見つめ直すことで、
都市を舞台に活躍する人材の育成やイノベーションの創出を促進しています。

地域の文化的潜在力の向上を目指して
神奈川県立歴史博物館との博学連携

都市イノベーション研究院
大野 敏 教授
ONO Satoshi

文化財建築の保存と博物館としての活用を地域に向け発信する

本学の都市イノベーション研究院は、10年以上前から神奈川県立歴史博物館の旧館である重要文化財「旧横浜正金銀行本店本館」の非公開部分を見学させてもらってきました。そのご縁もあり、2018年度には文化財建築の調査を本研究院が担当。以後ますます連携が強まり、学部と大学院の演習で文化財の保存と博物館としての活用という課題に取り組んでいます。本演習では、昭和40年代に、銀行から博物館への転換を、本学の建築学科が主導した歴史を踏まえ、日本の為替金融発祥地における銀行建築が、県立歴史博物館として存在する意味を検討。文化財の保存と活用の意義を、利用者と博物館、双方の立場から考察しました。その集大成として、2024年に神奈川県立歴史博物館コレクション展「本店本館創建120周年記念横浜正金銀行」を開催するに至ります。

関東大震災により設立時の設計図は行方がわからないため、学生たちは実測調査をして図面を作成。残された資料を丁寧に整理し、緊張感をもってコレクション展に取り組みました。博物館の正式展示の一部を担当するという名誉ある役目には大きな責任が伴いますが、学生たちはそれによく応えました。来場者からは、模型を使ったわかりやすい説明や、新たな活用方法の提案などへの好意的な反応をいただきました。この取り組みでは、県立歴史博物館だけでなく、馬車道という周辺地域と博物館とをつなぎ、地域の魅力を地域の人たちに伝え、来訪者に発信するツールとしての手応えを感じました。関内地区では、同じ都市イノベーション研究院が取り組んでいるアーバニストスクールの活動が大きな成果を上げていますが、今後はその活動とうまく連携していけることを楽しみにしています。

髙田 浩一郎
TAKADA Kouichiro
都市イノベーション学府
建築都市文化専攻
修士1年

実践的な取り組みを通して得られた成長

この博学連携プロジェクトは、大学院の課題として行われています。今年度は博物館に保管していた資料をどのように利活用して、専門的な情報を一般向けに公開するかの提案を行いました。学部で行うようなアイデアレベルの提案とは異なり、実践的な提案を行うなかでは、実地調査から関係者との交渉までを担当。当初は多くの学生が戸惑っていましたが、課題設定から提案まですべてを担ったことで、学生間のコミュニケーションの質や量が向上しました。結果、適材適所での活動がかないました。このプロジェクトを通して、旧横浜正金銀行本店本館という建物が、日本における激動の時代の生き証人であることを実感しました。今後は地域の方と直接触れ合いながら、その価値を伝えていければと思っています。

関内を舞台に考える社会実装プロジェクト
アーバニストスクールプログラム

都市イノベーション研究院
野原 卓 教授
NOHARA Taku

社会人と学生が協働することで、多様性を備えたアーバニストを育む

このプログラムは、横浜・関内地区を題材として、都市を舞台に活躍する人材「アーバニスト」を育てることを目的としています。関内地区とその周辺を「イノベーションネイバーフッド（創造界隈）」と見立てて、公共空間、歴史的資源、空きスペースの活用、新たな経済の創出などをテーマに、現役大学院生と社会人が3か月間ともに、具体的な社会実装プロジェクトの企画立案に挑みます。

2024年度には、地域イベント『かんないテラス』に参加。会場となる関内桜通り沿いの植栽帯に、滞在しながら対話を促すストリートファニチャーを設置しました。来街者や周辺事業者と会話しながら、公共空間の新たな使い方や、創造性を高める術を探り、当エリアにおける魅力向上のアイデアを検証する1日となりました。また、それまであった建物からの移転を予定している老舗ジャズバーのラストライブも企画。特徴的な店内の様子を図面で示したり、ジャズライブを行うなど、お店の物語を発信する役目を果たしました。

学生たちは、普段接点が少ない社会人や地域のみなさんとのコミュニケーションに苦闘しながらも、具体的な場所を念頭に企画を立案。実践的な学びに取り組んでいます。プログラムの参加者からは、イベントの企画から実施までを一貫して経験できることを評価する声がありました。現場で活躍する講師からのアドバイス、地域との連携が魅力的だったとの反響もあり、一定の手ごたえを感じています。今後は「各自のスキルを活かす専門家」と「都市に暮らし、都市に関わる生活者」という両面性を持って活躍するアーバニストがどんどん増え、さまざまな街で創造的な取り組みが連鎖的に起こることを期待しています。

年盛 文也
TOSHIMORI Fumiya
先進実践学環
修士2年

関内地区の資源、バーの魅力を発信

社会人のみなさんと協働することで、実践的な視点をもって地域への提案ができることが、当プログラムに参加した理由です。私が所属したグループは、関内地区の資源であるバー文化に着目しました。地域の声を聴き、「関内にバーが多いことは知っているが、具体的な情報は少ない」「空間的に入りづらさを感じる」といった課題を抽出しました。バーの魅力がオーナーの趣味や個性に深く根ざしている一方、それが新規の客層にとってはハードルにもなっている実態を把握した上で、若者たちが関内のバーに自発的に訪れ、地域のバー文化が持続的に発展することを目標にしました。社会人が感じる既存の魅力と、学生が感じるハードルの高さについて双方の視点から指摘し合ったことが、多角的なアプローチを持つ施策につながったと感じています。

03.

新湘南Core

新湘南共創キャンパスでは「健康まちづくり」を合言葉に、
ウェルビーイングを軸にした暮らしのかたちを探究しています。
健康長寿社会の実現へ向けた研究開発や、
地域課題の発見・解決に向けた実践的教育に取り組んでいます。

歳をとっても健やかに歩き、快活に働くことができるように
てくてくてっくワークショップ

都市イノベーション研究院
矢吹 剣一 准教授
YABUKI Ken-ichi

住環境と健康の関係を考察し、健康寿命を伸ばす「まち」をつくる

新湘南共創キャンパス（湘南アイパーク内）で行われる本ワークショップは、人々が高齢になっても健やかに歩き、快活に働き続けられる「健歩快働」を目的とした研究プロジェクトです。日常生活を妨げる建築や都市空間の障壁を減らすとともに、テクノロジーを活用することで地域住民の外出意欲を高め、歩きやすい「まち」の形成を目指します。また、人々の住環境と健康の関係についても学術的に解明し、日本全体で求められる健康寿命の延伸に寄与していきます。

ワークショップは「知る」ためのレクチャーと「動く」ためのウォーキングとの２本立てで構成しています。6月の2025年度２回目のワークショップでは「運動として歩ける環境点検会」を実施しました。レクチャーではノルディックウォーキングの健康への効果について本学教員による講義を受け、普段の歩き方との違いなどについて参加者で考えました。その後、「村岡をてくてくして、てっくdeチェック！」で会場周辺の歩道や公園、住宅地などを実際に歩きながら、地域の「歩行環境」を点検しました。参加者からは「自身の健康状態を確かめる機会になった」といった声のほか、「村岡地区のことをもっと知りたくなった」という感想が聞かれました。少数ながら参加者が積極的に日常の健康づくりに取り組むようになったとの報告もあります。一定の行動変容が生まれていることに手ごたえを感じているところです。

現在活動している藤沢市村岡地区は、JR東海道線の新駅設置やその周辺の開発が予定されており、今後大きく変貌を遂げる予定です。そうした機会を研究活動のフィールドとしてうまく活用していきたいと思っています。

田中 遼太郎
TANAKA Ryoutaro
都市イノベーション学府
都市イノベーション専攻
博士1年

地域の方々と触れ合いながら考える健康まちづくり

難しかったのは、健康まちづくりを具体化していくために、「村岡をてくてくして、てっくdeチェック！」の開催時に「どういった観点でまちを点検すべきか」を決めることでした。参加者への伝わりやすさや、まちの点検項目としての網羅性を考慮しながら運営スタッフ間で協議し、歩車道の整備、景観・歴史、交通安全性、犯罪に対する安全性、休憩スポットの５つを「まちを見る視点」に決定しました。これをもとにどの道を改善すべきか、道やまちのどの部分に注目してまちづくりを考えるべきなのかを検討し、地域のみなさんとともに健康まちづくりの実現可能性を追求しました。私の専門分野は都市計画なのですが、机上の計画がどのようにまちに実装されるのかを現実感を持って検討できた点が大きな収穫です。

医療現場との人材交流と課題解決の連携を考える
オモロイ病院プロジェクト

工学研究院
下野 誠通 准教授
SHIMONO Tomoyuki

地域医療の発展のために、住民の主体的な関わりを生み出す

2023年に本学と湘南鎌倉総合病院が包括連携協定を結び、ヘルステクノロジー研究の推進だけでなく、人材交流や医療現場の課題解決などにおいても連携するためにスタートしたのが「オモロイ病院プロジェクト」です。そのミッションは「病院と利用者のみなさんが感じている距離を縮めること」。なるべく病院を身近に感じてもらえるよう、1年目は「病院祭」の一環として院内を歩くワークショップを企画することに。利用者のみなさんが病院への理解を深められる場を設けるとともに、病院利用に関する地域の方々のコメントを集め、病院側と共有しました。2年目の2025年度は、1、2年生の学生たちが病院側の要望を聴き取り、前年度に経験した先輩の助言を受けながら、病院のファンをつくる活動に取り組んでいます。

超高齢社会に入り、何らかの形で病院と関わる人が増えています。一方で、最新医療や地域医療、医療従事者の育成への住民市民の理解がなければ、地域医療そのものの持続自体が困難になりかねません。本プロジェクトはそのような状況への理解を促すものです。病院からは、学生目線ならではの柔らかな発想が「オモロイ病院」に変えてくれると期待が寄せられています。学生にとっても、大学という普段の小さな世界、自身の専門分野という狭い世界を離れ、正解のない課題解決に取り組む場です。社会との向き合い方を学ぶいい機会になっています。

今後は、活動の幅を広げ「オモロイ新湘南プロジェクト」として、学生自らが新湘南の課題を発掘し、率先して地元の方々と楽しい解決策を見出していって欲しいと思います。

足立 真梨奈
ADACHI Marina
都市イノベーション学府
建築都市文化専攻
修士1年

病院と地域の方々をつなぐ

病院祭での企画に際し、まず病院のみなさんに現在の課題や懸念点を伺いました。そこで、私たちが病院と地域の方々をつなぐには、両方の立場を理解する必要性を感じたのです。地域の生の声をいかに引き出すか。手術室のツアーによって病院への理解や親しみを深めてもらったうえで、病院利用に関する意見を募るワークショップを提案したのはそのためです。結果的に、幅広い年代・属性の参加者同士に意見交換をしていただくに至ります。学生の私にとっては自ら提案したことが受け入れられる機会自体が貴重でした。今後もより良い企画によって、多様な病院のあり方を見出していければと思います。建築を学ぶ者としては、この活動を通して「人間のための空間づくり」について深く考察していきたいとも思っています。

04.

県西Core

県西 Core の特徴は、海や山の豊かな自然環境です。
ここでは、研究者と参加者がフラットに海洋環境の保全について
話し合えるトークイベントや、周辺住民が地域についてより深く学び、
主体的な活動を促すための場づくりを行っています。

真鶴の海の魅力を知り、その環境保全を考察
海まちラボ「海トーク」

環境情報研究院
下出 信次 教授
SHIMODE Shinji

海で起こっている問題を、住民同士で考える

2024 年度から臨海環境センターが主催してきた「海トーク」。これは真鶴町を中心に活動する本学 OB による NPO 法人ディスカバーブルーの取り組みを引き継ぐものです。研究者と住民が、ドリンク片手に会話できる気軽な雰囲気が特徴で、お子さま連れの主婦、中学生、漁師さん、ダイビングショップの方などが参加。地域の海について関心を寄せるみなさんが、真鶴町だけでなく他地域からも訪れます。

現在、真鶴周辺の海では温暖化の影響もあり、大型藻類が育たない「磯焼け」が問題になっています。地域の健全な海洋環境と海洋生物の多様性を、地域社会としてどのように保全し、持続的に利用していくのか。これら課題には、異なる立場の地域住民が関与することもあり、答えはシンプルに導けません。当イベントでは、こうした事象についての科学的な研究成果をわかりやすく示した上で、問題解決への第一歩として住民同士が議論、みんなで対応策を考えていくことを狙いとしています。毎回異なったテーマを取り上げていますが、開催時間の終了後までディスカッションが続くなど、活発なやりとりが繰り広げられる人気イベントです。

当センターは、NPO 法人ディスカバーブルーや真鶴町立遠藤貝類博物館の協力のもと、10 年以上にわたって地域の小学生に海洋生物や海洋環境について教えてきました。長く続けてきた甲斐あって、地域のみなさんの海に対する理解度が高まっていることを実感しています。海の中の変化にはなかなか気づきにくいものです。地域の海に今どんな問題が起きているのか。この活動を通じて、これからも海への理解を促す機会を提供していけたらと思います。

過ごしやすい空間を考える
キャンパスの魅力を耕すプロジェクト

都市イノベーション研究院
藤原 徹平 准教授
FUJIWARA Teppei

都市イノベーション研究院
小田切 駿 Y-GSA 設計助手
ODAGIRI Hayao

改修プロジェクトを通して、地域に開かれた学びの場をつくる

このプロジェクトの目的は、居場所をつくることと、その行為を通じて地域との交流を深めること。身のまわりの空間をより良くしたい都市科学部建築学科の 2、3 年生たちが主体的に集まり、キャンパス空間への提案はスタートしました。これまでにも、使われていないキャンパス空間に日干しレンガでベンチを作り、居場所を増やすことでキャンパスの魅力を耕してきました。

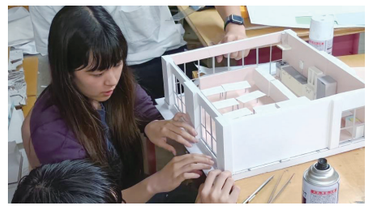
現在は、真鶴の臨海環境センターの改修プロジェクトを進めています。例年、建築学科の 2 年生たちは真鶴町を舞台に、設計課題が課せられます。何度となく真鶴へ足を運び、町の歴史や建築のリサーチを重ねた学生たちはこの地域への愛着を高めるのが常。そんな彼らがこの改修プロジェクトの主人公です。

ここは本学の学生だけでなく、他大学の学生や地域の小中学生も利用する場所です。そのため、たとえ小さな改修であってもどうすればさまざまな立場の利用者が近寄りやすく、過ごしやすい空間になるかを考慮しながら改修案を検討しています。詳細な実測をもとに図面を起こし、地域の皆さんに実際にヒアリングを行うなど、通常の設計課題以上にリアリティに富んでいるのが特徴です。始まったばかりの活動ではありますが、町へ開かれた学びの場の在り方を考える第一歩にもなっています。学生たちが真鶴らしさを意識しながら設計する空間には、大きな可能性を感じます。こうした教室外での活動が、学生たちの建築への理解を深める機会につながることを期待しています。

川井 慶
KAWAI Kei
都市科学部
建築学科
3年

キャンパスで学んだ成果を学外に広げる機会に

「自分たちの手の届く環境から変えていこう」というプロジェクトの姿勢に共感しました。また、常盤台キャンパス内で学んだ成果を、学外に広げるまたとない機会です。それらがプロジェクトへの参加を決めた理由でした。施設に最適なインテリアの大きさや既存の家具とのバランスの検討が課題となりましたが、1/20 の模型を作成し、何度も議論を重ねて解決策を導くことに。この活動を通して、複数のアイデアをひとつの設計に統合していく能力が身についたと思います。また、予算管理や施工精度の確認、センター長への説明といった実務経験を得られました。私自身の将来を考える上でも大きな意義のある学びです。今後は、常盤台キャンパスで学生が自由に活動できる場所をつくる際に、ここで得たスキルを活かしていきたいです。



YNU NEWS

Vol. 10

横浜国立大学の最新ニュース

NEWS 1

台風科学技術研究センター、大阪・関西万博へ出展

横浜国立大学台風科学技術研究センターは、『2050 年までに台風を「脅威」から「恵み」へと変える』をテーマに、EXPO2025 大阪・関西万博のムーンショットパークに展示しました。

この展示は温暖化により強大化が予想される台風を人為的に弱めることで被害を低減し、台風のエネルギーを奪って発電するなどして、台風を制御する未来を体感するものです。2025 年 8 月 20 日から 8 月 31 日までの期間中、のべ 12,000 人超が訪れました。

会場では、台風を制御する未来のシナリオを AI ロボットが描く台風戦略シミュレータや、個々の台風の “ 個性 ” を可視化した 3D 模型などが展示されました。本学の梅原学長も見学に訪れる中、台風科学技術研究センターのセンター長を含む複数の科学者が来場者やマスコミの取材に対応。筆保センター長の研究室の学生もスタッフとして活躍しました。

本ブースは内閣府のプロジェクト「ムーンショット型研究事業」のひとつでもあり、内閣府主催の小中学生参加型ツアーなどにも利用されています。

台風制御研究には台風の構造をより正確に把握することが不可欠であり、同年 10 月には、航空機で台風 22 号の中心付近に近づき直接観測し、貴重なデータを集めることに成功しています。

NEWS 2

シンガポール、台湾、タイ、各地で同窓会開催

2025 年 4 月 8 日（月）、シンガポールの「TSUKUNE ICHIGO」にて、YNU シンガポール同窓会（SG 常盤会）が開催されました。1977 年に文部省奨学生として本学工学部に留学された Tan Jong Lek 氏も出席、日星両国および ASEAN 諸国の留学生による「心と心のふれあい」の理念のもと、長年にわたり継続してきた交流活動について、熱意あふれるお話を伺うことができました。

2025 年 8 月 16 日（土）、台北のスタイルレストラン赴宴粤菜で YNU 台湾同窓会が開催されました。同窓生 6 名が集いアットホームな雰囲気のなか YNU で過ごした日々を懐かしく振り返り、和やかな雰囲気で時を過ごしました。

2025 年 9 月 7 日（日）、バンコクにて YNU タイ同窓会が開催されました。約 9 年ぶりのタイでの開催で、各地から同窓生 17 名が参加。本学からは田名部元成副学長（教育・国際担当）ほかが出席。参加者からの近況報告や在学中の思い出など、話題の尽きない会合となりました。

NEWS 3

本学の教員7名が文部科学大臣表彰を受賞

令和 7 年度科学技術分野の文部科学大臣表彰「科学技術賞（開発部門）」「科学技術賞（科学技術振興部門）」「若手科学者賞」に本学の教員 7 名が受賞しました。同賞は、科学技術に関する研究開発、理解増進等において顕著な成果を収めた者について、その功績を讃えることにより科学技術に携わる者の意欲向上を図り、もって我が国の科学技術水準の向上に寄与することを目的としています。

受賞者一覧

【科学技術賞 開発部門】

筆保弘徳　総合学術高等研究院、台風科学技術研究センター長、教育学部教授

【科学技術賞 科学技術振興部門】

尾崎伸吾　工学研究院教授

【若手科学者賞】

信田尚毅　工学研究院准教授
中田雅也　工学研究院准教授
景山達斗　工学研究院助教
多々良涼一　工学研究院准教授
大久保光　環境情報研究院准教授

YNU PEOPLE

挑戦し続ける横浜国立大学の「人」。

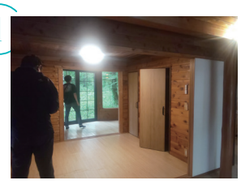
横国が誇る研究者をクローズアップする、〈YNU MAESTRO〉。
学生たちのベンチャー精神に迫る、〈VENTURE SPIRIT〉。
インタビューを通じて、横国の “今” をお届けする。

YNU PEOPLE
YNU MAESTRO

データサイエンスで社会課題に挑む。
研究と実社会の架け橋となって、新しい価値を生み出す。

3 KEYWORDS
本橋先生をひもとく
3つのキーワード

1 空き家の現地調査



現地調査では、データだけでは分からない周辺環境や生活動線、近隣との距離感を重視しています。建物の状態だけでなく、「なぜ使われなくなったのか」という背景を想像しながら確認する点が難しくもあり、重要なプロセスです。

2 学生が制作したユーザー好みのコーヒー豆をお薦めするアプリ

学生は好みという主観的な情報をどう数値化するかに苦労していました。私は「完璧なモデルより、まず動く仕組みを作ること」を助言し、試行錯誤を通じて実データ活用の面白さを学んでもらいました。

3 大学発ベンチャーの立ち上げ

展示会では研究内容に対し「すぐに使えそうだ」という実務的な反応が多く得られました。研究成果を社会に届けるには、技術だけでなく伝え方が重要であり、その後の事業化や実証実験につながっています。

データ分析への情熱が拓いた、実社会と結びつくデータサイエンス

統計学の知識をビジネスに活かすべく、実社会で役立つデータ分析の研究を進めているのが本橋先生。研究者を志したのは、高校時代から抱いていた「起業したい」という強い思いがきっかけだ。元々数学的にものごとを考えることが好きだったため、ビジネスの分野で統計学を活かす道を模索し、データを使って消費者の行動を分析する「マーケティング・サイエンス」にたどり着いた。大学での専攻は社会学部産業関係学科。マーケティング・サイエンスを学ぶ学科としては珍しい学問領域だったが、数値やデータをもって分析し、法則や傾向を論理的に導き出す定量的な研究を行う先生が多い環境だ。統計学やマーケティングを通じて「数学やデータをビジネスに生かすことに慣れ親しんだ」という。

データ活用が「今や企業が生き残るための必須条件」であると語る本橋先生の研究対象は、購買履歴や不動産データ、口コミなどの多様で膨大な実データと、その分析方法だ。研究の大きな特徴は、学術的な理論にとどまらず、企業や自治体と連携し、実践的に進めていること。時に、データ分析で出た予測がどれだけ現実に近いかを示す「予測精度」を追求するあまり、分析結果が不明確になるという問題が生じる場合がある。なぜそのような予測が出たのか、その理由やメカニズムを人が理解できることを「解釈性」というが、本橋先生はその予測精度と解釈性の両立を目指すモデル構築を行っている。

企業・自治体との実践連携と、研究成果の社会実装

「実社会に生かせる研究をしたい」という信念のもと、常に企業や自治体と連携し、現場の課題解決を重視する本橋先生。企業との共同研究の具体例として、消費者が店舗などで利用するポイントカードに蓄積されるポイントプログラムのデータを活用したマーケティング施策の最適化があげられる。なかでもVポイントのデータを使い、「誰にどういうクーポンを発行すれば消費を促されるのか」「どういう人に、どういったクーポンを、どういったタイミングで配れば効果的か」を明らかにする研究を行った。これは、過去の購買履歴に基づき、顧客が「このクーポンに反応してくれるだろう」と予測しながら、クーポン配信の最適化を図るものである。

大手メーカーとは知的財産（知財）マネジメントに関する共同研究を実施。特許申請が拒絶された際に届く「拒絶理由通知書」の内容を分類する手法を開発した。出願業務の効率化と高度化に貢献した成果を基に、大学発ベンチャーを立ち上げるに至った。

近年は地方創生につながる社会課題解決にも注力し、空き家バンクを運営する企業と連携して空き家の利活用に関する研究を進めている。空き家バンクのデータを用い、どういう立地の空き家が成約しやすい傾向があるか、価格帯はどの程度が適当かといった分析を実施。「この研究が地域創生、地方創生につがっていけばいいですね」と研究結果の社会貢献を目指す。

アプリ制作と実データ活用で「価値を生み出す人材」を育成

「学生には実社会で活用できる実践的な能力を身につけてほしい」。本橋先生が常に強く望んでいることのひとつだ。その思いから、ゼミ生一人ひとりがアプリを制作するという課題に取り組ませている。単にアプリを作るだけではない。どんなニーズがあり、アプリでそのニーズをどう満たせるのか、という問題解決の視点をもって取り組むことを意識させる。

このアプリ開発の授業では、コーヒーを買おうとしている人をターゲットとしたアプリが登場した。これは、自分のコーヒーの好みを入力すると、既存の豆のデータからどの豆が最適かを自動的に選んでくれるというレコメンド機能をもつユニークなものだ。

また、学部1年生から参加するデータサイエンス教育プログラム（DSEP）では、学生は空き家バンクのデータを使って利活用の傾向分析を行うなど、早期から実データを用いて社会課題に挑戦する環境を提供している。

「次世代を担う学生の皆さんは、知識をつけるだけではダメだ」という本橋先生。「得た知識をしっかりと活用して価値を生み出していけるような人材に育っていってほしいです」。

PROFILE

埼玉県出身。専門はマーケティング・サイエンス、ビジネス・データサイエンス。横浜国立大学ベストティーチャー賞（2019年）、野村総合研究所マーケティング分析コンテスト最優秀賞（2012年）、Best Conference Track Paper Award 2023 Global Marketing Conference at Seoul などの受賞歴を持つ。

YNU PEOPLE
VENTURE SPIRIT

「言えない空気」を壊すために、学生が挑んだ生理の企画展

ダイバーシティ戦略推進本部と有志の学生５名が、月経に関する企画展を立ち上げた。異性間のタブー意識を打破し、当事者同士の孤立感を解消するため、「生理痛体験」という革新的なアプローチで相互理解を深める場を提供した。

教育学部 学校教員養成課程
特別支援教育専門領域　3年
井上 歩美
INOUE Ayumi

教育学部 学校教員養成課程
教育学専門領域　3年
頭島 壮汰
KASHIRAJIMA Sota

女性の視点に立つことが、フランクに話すきっかけに

横浜国立大学とフェリス女学院大学の提携をきっかけに、ダイバーシティ戦略推進本部と学生有志５人で「あなたにとっての“生理”って？」という企画展が開催された。準備期間は約３ヶ月半。メンバー間でのざっくばらんな雑談や各自が調べてきた情報の共有を繰り返す中で、企画の種が生まれていった。月経が女性にとって身近でありながら、なかなか話す機会のないテーマであることにメンバーは着目。触れにくいという雰囲気を変え、もっと学生に関心を持ってもらおうとの催しだ。

井上さん自身も家庭内で生理は「言ってはいけないこと」のような認識で、気軽に口に出せない気まずさを感じていた。自身の体調管理への意識が高まる大学生というこの時期だからこそ、意義を感じたという。

一方、男性として参加した頭島さんは、異性の兄弟がいないので「知らないまま来てしまった」と問題意識を持っていた。「知りたいけど、どうしたらいいかわからないという人が多いのではないか」という思いから、何かアクションを起こせたらと参加を決める。

準備期間は、メンバー間の雑談から始まり、互いの認識の違いや新たな発見を議論する中で、次第に企画テーマやコンセプトが自然に生まれていった。

生理痛体験と座談会で「当事者意識」を醸成

企画構成は「生理痛体験＆最新フェムテック製品紹介」「参加型パネル展示」「座談会」の３本柱。目玉である生理痛シミュレーターは、電流で生理痛を再現するもので、痛みを共有することで互いの理解を促す。学生メンバーたちが伊藤忠商事の展示で見た映像から、体験こそが相互理解に有効だとヒントを得た。この着想に基づき、開発企業にコンタクトを取り機器の導入が実現したという。

男性参加者からは、体験を通じて「え、本当にこんなに痛いの？」といった女性に対する問いかけが生まれ、生理やそれに伴う体調などについて、改めて女性と話すきっかけになったという。女性からは「自分だけじゃないんだ」という安心感や仲間意識が感じられたというコメントが多く寄せられたが、個々の症状の違いから「軽い人が重い人の苦しみを見過ごしてしまうなど、女性同士でも理解し合えない部分もある。女性の敵は、意外なことに女性かも」（井上さん）という同性間の実態も明らかになった。 当初、「生理」を扱う企画展には男性は入りにくいことから、参加人数を危ぶむ声もあがった。そこで開催場所を人々の出入りが多い図書館の入口付近に設定。書き込める展示ボードや触れてめくることができるパネルを設けるなど、体験型の工夫も凝らし、多くの人の興味を惹いた。

開催当初こそ来場者は少なかったが、展示内容が口コミで広がり「会期の後半になると参加者が増えていった」と井上さん。ユニ・チャーム株式会社から提供された生理用品サンプルを無料配布したことも、集客に有効に働いた。

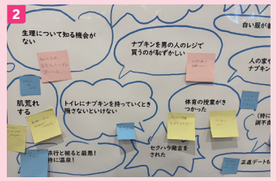
座談会では、それぞれの視点からのディスカッションが行われた。参加者の多様な悩みが共有され、参加者間で多くのコミュニケーションが生まれていったことが収穫だ。頭島さんは「この企画展を開催したことで、異性間の意見交換が行われたことがとても嬉しかった」と振り返る。

立場が違う人への理解が、固定観念を打破する

井上さんは約３ヶ月半の活動を通じ、「デリケートな話題」を共有する過程で、全く知らない者同士だったメンバー間に深い信頼と仲間意識が生まれたと実感。互いのプライベートな事柄を話し合う過程で、チームとしての結束がより強まっていったという。当時を「自分が思っていた以上に価値のある活動だった」と振り返る彼女は、今後も立場が異なる人に対して理解を深め、思いやりを持つことを目標に掲げる。一方、ジェンダー問題に限らず、「さまざまな固定観念を認識し、マイノリティをめぐる課題を打破する取り組みを行いたい」と頭島さん。必ずしも結果を求めるのではなく『やらないよりはやった方がいい』くらいの気持ちできっかけを提供し、それが社会の認識を変えることになったら、とこうした活動の意義を見出している。

MY MEMORY

1 準備期間は３ヶ月半ほど。思いを打ち明け話し合うことで、結束していった。



2 自由に書き込める展示。生理に関するさまざまな思いが寄せられた。

3 電流によりシミュレートする生理痛体験は、男性参加者に驚きを与えた。

4 ユニ・チャーム株式会社から提供された生理用品サンプルの数々。

About Us

ダイバーシティ戦略推進本部 有志学生

学生5名が月経に関する企画展「あなたにとっての“生理”って？」の企画を立ち上げ開催。生理痛シミュレーター体験等を通じて、男女間の月経に関する相互理解を促進し、率直に対話できる環境づくりを目指した。

「スーパークリエータ」認定は通過点。
社会の課題解決に貢献し続ける研究者でありたい。

2024 年度「未踏 IT 人材発掘・育成事業」に採択され、「スーパークリエータ」に認定された九鬼琉さん。
学部 1 年時からサイバーセキュリティの最先端に身を置き、
研究とビジネスを両立しながら社会課題の解決を目指す。

環境情報学府 情報環境専攻
情報学プログラム　修士課程 1年
株式会社オプシス 代表取締役社長

九鬼 琉

KUKI Ryu

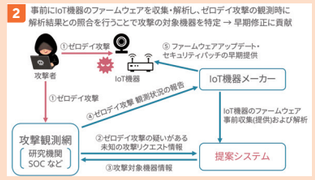
学部1年からの研究活動が未踏事業へ結実

九鬼さんが情報技術へ関心をもったのは、中学 1 年次にコンピューター部でゲーム制作を始めたことをきっかけとする。その後、高校時代にはシステム開発を行う中でセキュリティ問題に注目。「システム開発に内在するセキュリティ上の弱点を突く、攻撃者の技術や発想に興味を持って」と、サイバーセキュリティの分野に傾倒していった。大学入学後、学部 1 年の秋学期からは理工学部の「ROUTE プロジェクト」を利用。サイバー攻撃の観測研究を開始するに至る。

この研究活動を背景に、学部 3 年の 2024 年 2 月頃に経済産業省所管の情報処理推進機構（IPA）が実施する「未踏 IT 人材発掘・育成事業」にエントリー。採択率は 10% 程度という難関だが、「ちょうどこのタイミングで思いついてしまった。思いついたら出すしかない」と、卒業論文の執筆と並行してのチャレンジを決意。そのモチベーションは、未踏事業に携わることが実績になること、プロジェクトマネージャー（PM）や約 40 人の同期生など「優秀な人々がいる環境で刺激を受けられることが魅力的」だったこと。九鬼さんはこのプロジェクトの推進費用として採択金を受けた。

MY MEMORY

「未踏IT人材発掘・育成事業」のブースト会議（キックオフミーティング）で自身の採択プロジェクトについて発表した。



「未踏IT人材発掘・育成事業」で開発したファームウェアを収集・解析するソフトウェアの概要と活用シナリオを示す図。

「未踏IT人材発掘・育成事業」修了式／スーパークリエータ認定証授与式にて

未踏IT人材発掘・育成事業　スーパークリエータ認定証

17万件以上のファームウェア解析による革新的アプローチ

未踏事業で取り組んだテーマは、「ゼロデイ攻撃の対象となる IoT 機器を早期特定するシステムの開発」だ。IoT 機器のセキュリティ上の弱点（脆弱性）が発見されると、メーカーはセキュリティパッチを出す。ゼロデイ攻撃とは、それが出る前に攻撃がされてしまうこと。従来の観測システムでは、新しい攻撃が来ても標的機器がなかなか特定できず、対策が遅れることが課題だった。

この課題を解決するために、九鬼さんは IoT 機器そのものではなく、メーカーのホームページなどで「公開されているファームウェアを大規模に集めてきて」解析するアプローチを採用。世界中にある約 17 万件以上のファームウェアを自動で収集・保存し、バーチャル空間で攻撃と照合することで、「少なくとも影響を受ける機器の候補は見つけられる」という発想でシステムを構築した。開発は卒業論文と並行して、基本的に一人で進めていった。ルーターなど世界中の IoT 機器が持つ「ファームウェア（機器を制御するためのソフトウェア）」の動作を、コンピューター上のバーチャル空間でそっくりそのままエミュレートする必要があるが、特にそのバーチャル空間での動きを本物の機器と同じように再現するのに苦労したという。

PMであるさくらインターネット社長、田中邦裕氏からの助言も受け、エミュレーションによる動的解析と実装のコードだけを調べて特徴を見る静的解析を組み合わせることで、精度を向上させた。

研究とビジネスを両立させる「二刀流」の未来

プロジェクト期間中の活動を評価され、九鬼さんは 2025 年 5 月に「スーパークリエータ」に認定された。この認定について「名誉なことですごく嬉しい」と感じた一方、歴代の有名クリエータと並ぶことに「大きな責任」を感じ、気が引き締まる思いだったという。田中 PM からは、技術的な成果だけでなく、「このプロジェクトの成果をどう見せるか」が非常に重要なポイントだと指導を受けた。成果発表では「IoT 機器に侵入するデモンストレーション」を構成するなど、成果を分かりやすく伝える工夫を行った。この経験から「良いものを作るだけで十分ではなく、どう伝えていくかも重要」という、社会実装に向けた視点を学んだという。

現在は大学院でハニーポット（サイバー攻撃を観測し分析するためのシステム）による攻撃観測や、AI を活用したセキュリティ対策について研究している。ここで開発した技術を使って企業や警察組織へ情報提供を行うなど、実社会に生かしていることがポイントだ。九鬼さんは学部生時代に「株式会社オプシス」を創業しており、研究活動と並行して主に開発事業も行ってきた。今後は、博士課程への進学も視野に入れつつ、「研究者として大きな組織の中で多額の資金を使って研究を進める道と、ビジネスをうまく両立したい」と胸を張る。「社会全体におけるサイバー脅威の低減と安全な情報社会の実現に貢献していきたい」という将来への抱負を語ってくれた。

About Us

ROUTE (Research Opportunities for UndergraduaTEs)

理工学部の1年次から最先端の研究に参加できるプロジェクト。多岐にわたる分野で「本物の研究」に触れ、先輩や教授からの手厚いサポートを受けながら試行錯誤を通じて研究の面白さを知り、取り組むことができる。

横浜国大の名物授業!

「横国ならではの学びが味わえる!」と、学生の間でも評判の授業があります。
シラバスからは読み取れない、その魅力に迫ります。

授業名 技術経営論

イノベーションはいかにして生まれるか?

授業内容について教えてください。

製造企業が技術を用いて付加価値を生み出すプロセスについて学びます。学習のポイントとなるのは、「どのように技術を開発・調達するか」、「どのように技術を製品に結びつけるか」、「どのように開発メンバーを組織するか」といった問いです。また、技術経営がいかにしてイノベーションを実現するのかについても学びます。この授業では、理論と事例をセットで提示するのが特徴です。たとえば、大企業が陥りがちな「イノベーションのジレンマ」を紹介する際には、「カシオのデジカメ開発」といった実際のケースも例示。受講生が自ら理論を応用して解釈を考えられるよう工夫しています。

授業に対する学生の反応はいかがでしょう。

日頃の学習を評価するため、授業内容に関するレポートを毎回課しています。受講生にとってもかなりの負担になるかと思いますが、「大変だけど、復習のための良い機会になる」というコメントが毎年多く寄せられています。他学部受講制度を利用して受講した理工学部生からは、「イノベーションを扱う理系の学生にこそ受講を勧めたい」といったコメントをいただいたこともありました。

氏名 **真鍋 誠司** MANABE Seiji

所属 経済学部／国際社会科学研究院／総合学術高等研究院 教授

専門 イノベーション・マネジメント・技術経営

知識をインプットするだけでなく、自分で考えアウトプットする機会を重視しています。授業中にその日の講義内容に関するクイズを出し、挙手で答えてもらうことも。そうした機会を通じて、技術経営の理論を実務や実践に応用できるようになることを狙っています。

授業名 建築史実習

千年に わたる建築文化を現地で 学び、体験する。

授業内容について教えてください。

6泊7日の日程で、奈良・兵庫・京都・滋賀に点在する国宝や重要文化財の建造物を巡る集中講義です。学生個人では見学許可を得るのが難しい場所も含め、多くの歴史的建造物に触れられる貴重な機会です。講義では、古代から近代に至るまでの木造建築文化の発展過程を中心に、実物を通して学びます。意匠や技術だけでなく、中国の建築文化からの影響などの社会的側面も踏まえて講義するのが特徴です。また、学生は事前に1人1棟を担当し、レポートを作成。見学時には担当学生が実際に解説を行うことで、単なる見学に留まらない能動的な学びを目指しています。

授業に対する学生の反応はいかがでしょう。

6泊7日を共に過ごす集中講義であり、学生にとっては貴重な体験となるため、非常に好評です。特に、通常では見学が難しい国宝や重要文化財の内部空間を実体験できる点も大きな魅力となっています。また、事前に担当の建物を調査・発表する「能動的な学び」の形式も、理解が深まると評価されています。卒業時のアンケート調査においても、大学生活で印象的だった講義のひとつとして挙げられることも多い授業です。

氏名 **守田 正志** MORITA Masashi

所属 都市科学部／都市イノベーション研究院 准教授

専門 建築史・都市史

建築は図面や写真だけではわからない、独特の3次元空間を持ちます。この授業では、現地でその空間を体験できることが面白い点です。千年以上続く我が国の建築文化を肌で感じ、観察することで得られる経験は、その後の学びの糧となるはずです。

授業名 Tennis : Beginning

テニスを通じて学ぶ、思いやりと国際交流。

授業内容について教えてください。

学部生が受講できる全学共通科目で、実技を通じてテニスの基礎知識やスキルを学びます。国際交流科目という位置付けでもあり、留学生が受講しやすいよう、やさしい日本語と英語で授業が展開されます。日本人学生と留学生がともにスポーツを楽しむことを通じて、多様性を受け入れる力を自然に育むのが特徴です。また、「ルール」という共通の基盤の上でテニスをともに楽しむことで、言語や文化の壁があっても自然とお互いの気持ちや考えがわかるようになっていくことがあります。テニスを通じて異なる文化を仲間と協力し合いながら学べる——そんなユニークな授業です。

授業に対する学生の反応はいかがでしょう。

最初のうちは、言語や文化の壁があるからか同じ国籍の学生同士で固まっている様子も見られます。しかし、回数を重ねるうちに、すぐに打ち解けていく様子が毎年見られます。言葉がスムーズに通じなくても、試合中の「Nice」の声がけで気持ちが繋がる。そんな自然な交流が生まれる授業です。また、「将来の留学に向け、英語を使う機会を得たい」という目的で受講する日本人学生も毎年います。

氏名 **相羽 枝莉子** AIBA Eriko

所属 教育学部／教育学研究科 助教

専門 専門：体育・スポーツ心理学

テニスは国際的に親しまれており、生涯にわたって世界中で楽しめるスポーツです。この授業を通じて基本を学んでおくことで、将来の国際交流のきっかけになるかもしれません。私自身も、留学先でさまざまな国籍の仲間たちとテニスをしたことが、大切な思い出になっています。

ON & OFF SITUATION OF YOKOHAMA NATIONAL UNIVERSITY STUDENTS

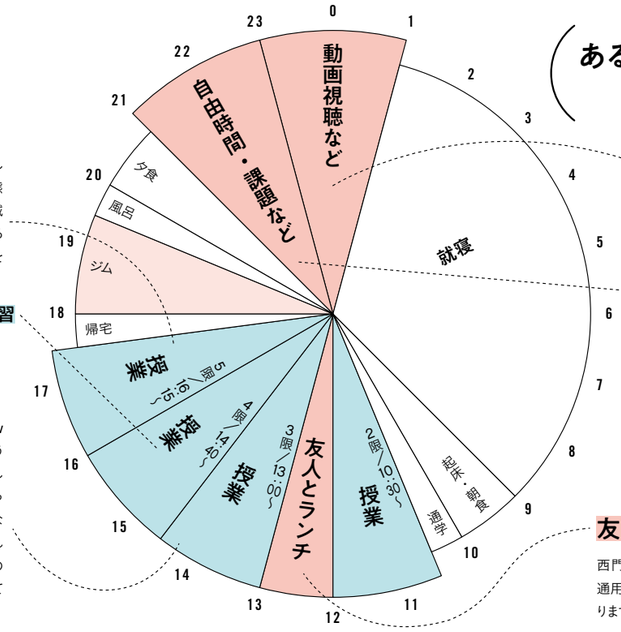
横国生のオン&オフ事情

毎日、授業や課外活動、サークル活動と充実した生活を送る横国生たち。彼らはどんな日々を過ごしているのでしょう。
授業や課外活動の時間をオンタイムとすれば、合間のランチや自宅でくつろぐ時間はオフタイム。
3名の横国生に登場いただき、ある1日のオンオフ事情を探ってみました。

CASE_01 気象学と猫サークルに夢中！ 都市科学部 鈴木海聖さん

気候変動の研究を専門とする気象学の研究室に進むことを目指し、勉学に邁進中の鈴木海聖さん。都市科学部環境リスク共生学科での学びが気象に興味を持つきっかけになったそう。キャンパスの地域猫のお世話をする「猫サークル」では、猫たちに癒しをもらいながら、筋トレにも精力的に取り組んでいます。

ある木曜日のスケジュール



5限：環境リスク共生ワークショップ

先生方がそれぞれの専門研究を紹介してくれるオムニバス形式の講義。生態学、地質学、気象学など幅広い領域に触れられ、研究室選びの参考になる点が魅力。気候変動の研究に興味を持ったきっかけのひとつです。

4限：環境リスク共生演習

3限：地球ダイナミクス

衛星画像サイト（Copernics browser）を活用し、地球の表面環境がどう変化しているかを自分で調べて発表します。温暖化で南極の氷がどう変わったかや災害後の森の回復など、壮大なテーマを自由に選べるのが魅力。みんなが好きなテーマを深く掘り下げるので、他の学生のプレゼンを聞くのがとても刺激的で面白いです。

就寝前に動画鑑賞

話題の映画やYouTubeなどで趣味やゲーム、旅行記の動画を見ることが好きです。

世界遺産の勉強・調査

旅行や世界遺産が好きで、自由時間にスマートフォンで調べ勉強しています。大学1年次に世界遺産検定1級を取得。ヨーロッパの建築に興味があり、イタリア旅行も経験しました。

友人とランチ

西門近くのお弁当屋さんで買ったり南通用門のインドカレー店に行くこともあります。

オンのシーン

学科の授業でフィールドワーク

海・山・森・都市など様々な環境を対象に調査・研究できるのが面白いです。2年次には真鶴まで行き、船で海洋プランクトン採取や海洋環境調査を行いました。フィールドでの体験に加え、座学の知識を総動員しレポートを完成させたときに、大きなやりがいを感じます。

猫サークル

キャンパス内の地域猫4匹（ギガ、チビ、チビママ、ビター）のお世話をしています。猫は入学試験の日に出会って以来大好きになり、餌の時間になると集まってきてくれるのが一番の癒やしです。

マストアイテム カメラ

家族から借りたもので、猫を撮りたいという目的でカメラを始めました。サークルの広報活動（SNS）や文化祭グッズ制作（クリアファイル等）でも大活躍です。

オフのシーン

ジムで筋トレ

夜はジムで週4〜5回ペースで筋トレをするのがルーティン。友人に誘われたのがきっかけで、6ヶ月で15kgの減量に成功。現在は筋肉をつけることに注力しています。

自転車での通学

雨の日以外は通学にも利用しています。自宅が近いので自転車で15分です。

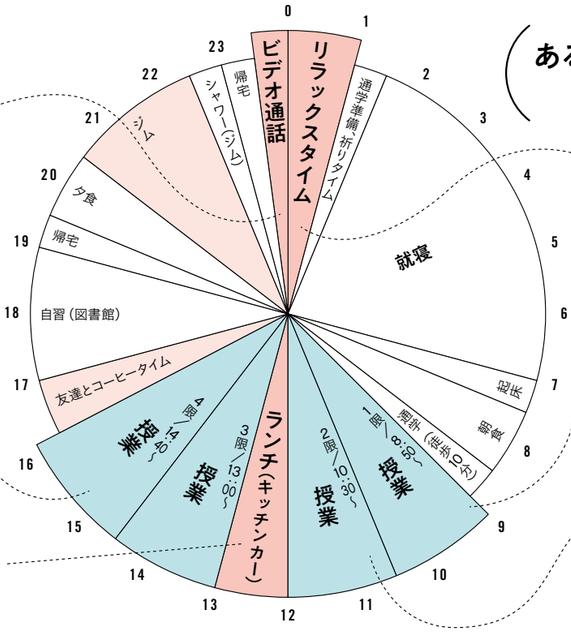
お気に入りスポット 南門や理工講義棟前のベンチ

南門や理工講義棟前のベンチは、地域猫たちがいるエリアのひとつで、オフタイムにはベンチ付近にいる猫たちを撫でて癒されています。

CASE_02 日本の文化と社会を学ぶ！ 都市科学部 カンメイボンさん

ソクラテスプログラムのカンメイボンさんは、ミャンマー出身の留学生。幼い頃から日本の漫画やアニメに親しみ、日本での学生生活に憧れ来日。家族とは離れての生活ですが、ビデオ通話で日々連絡は取り合います。現在は、社会学や日本の歴史を深く学びながら、知識と体験を結びつける毎日を過ごしています。

ある火曜日のスケジュール



家族とのビデオ通話

帰宅から就寝までの間に、ミャンマーに住む両親、タイで学んでいる妹、そして日本にいる私で毎日ビデオ通話をしています。今日あったことや、食べたものなど日常の出来事を伝え合うことでほっと安心するひとときです。

4限：Workshop on Sustainable Societies and Culture

キッチンカー

食堂はすぐに混雑するため、モニュメント近くにいるキッチンカーを利用することが多いです。プリトーなどを買ってホールラウンジでランチタイムを楽しみます。

リラックスタイム

アニメや小説は、現実では体験できない世界や価値観に出会えるので、想像力が広がり、自分の考え方に刺激を与えてくれます。

1限：Urban Science

リモートで行われる授業で、社会（ソーシャルサイエンス）や歴史、環境といったテーマの講義です。

2限：Workshop on Environment and Resilience Studies

オンのシーン

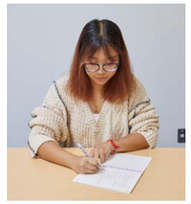
授業や課題を通して新しい知識を学んでいる時

歴史や社会に関するテーマを深く調べている時に視野が広がるのを実感します。学んだことを自分の言葉で整理し、先生や友人と意見交換すると「理解が深まった」という達成感を得られます。最近は横浜の歴史に関心があります。

Workshop on Sustainable Societies and Culture

SDGsについて学び、ワークショップを企画・実行できる授業。学童保育でのアルバイト経験を活かし、外国人としての視点も生かしながら、学びを社会に還元できることにやりがいを感じます。

マストアイテム ノートとペン



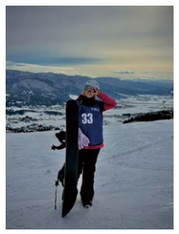
授業のメモや一日のスケジュール、自分の考えなどを手書きで書き留めています。もちろんパソコンも使いますが、紙にペンで書く方が頭の中が整理されると感じるため欠かせません。日記もノートに記します。

オフのシーン

日本でミャンマー料理も

ミャンマー料理に使う調味料は、日本のスーパーで手に入るため自炊が可能です。ミャンマーのカレーはちょっと辛いかも。友人のために美味しいものを作る喜びがリラックスの源です。

スノーボードにハマっています！



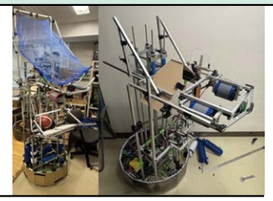
横国に入学してからの新しい趣味、スノーボード。友人たちと長野や新潟のスキー場に何度か行きました。冬休みが楽しみです。

お気に入りスポット 学内のカフェ

学内のカフェでコーヒーを飲んだり、友人と話したりしてリラックスしています。また、猫が大好きなので、キャンパスにいる猫と遊んで過ごすこともあります。

横国生のオン&オフ事情

ON & OFF SITUATION OF
YOKOHAMA NATIONAL UNIVERSITY STUDENTS



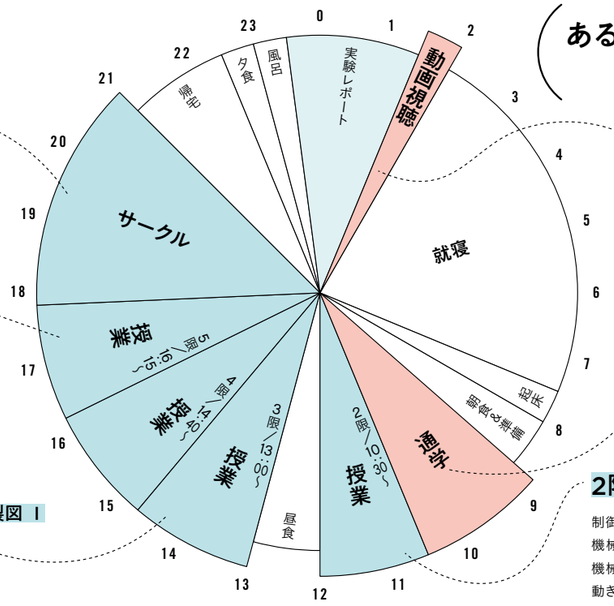
CASE_03

ロボット製作と登山に没頭。

理工学部 **後藤 開**さん

幼少期からものづくりが好きだったことと、父が工学系の研究者であることから、機械工学の道へ進んだ後藤開さん。現在は、NHK学生ロボコンを目指すサークル「Robo+ism（ロボティズム）」の活動に力を注いでいます。また、週末にはワンダーフォーゲル部で登山を楽しむなど充実した生活を送っています。

ある月曜日のスケジュール


0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
動画視聴
実験レポート
風呂
夕食
就寝
サークル
就寝
昼食
授業
授業
授業